

データの分析手法を実践的に学ぶ機会を設け、各学校の研究主任による授業改善を後押し

長野県 飯田市教育委員会

飯田市教育委員会は、各学校が組織的に授業改善を進められるよう、2023年度から、全市立小・中学校で統一した学力調査を導入。各学校の研究主任が参加する研究主任会では、調査結果の見方を学び、自校の課題を見いだすワークショップを実施している。調査結果の何に注目すればよいかをつかんだ研究主任は、早速、自校の校内研修でその手法を実践。教員それぞれが担当クラスの調査結果を分析して課題を見だし、授業改善に取り組む動きにつながっている。

自治体概要

「德育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」を教育ビジョンに掲げ、小中連携・一貫教育やキャリア教育、コミュニティ・スクールを学校教育の基盤として推進。伝統的に公民館活動が盛んで、学校教育と社会教育との連携・融合を図っている。

人口 約9万5,000人 面積 658.66km²
市立学校数 小学校19校、中学校9校
児童生徒数 小学校約4,700人、中学校約2,600人
教員数 約720人

各学校の組織的な授業改善に向けて、学力調査を統一

飯田市教育委員会（以下、市教委）は2021年度、「第2次飯田市教育振興基本計画」を策定し、学校教育における「8つのアクションプログラム」の1つめに「学力保障・学力の向上」^{くまがいくにちか}を掲げた。熊谷邦千加教育長は次のように説明する。

「本市は、子どもが自分の願いや問いを発して学びをつくる『ムトスの学び』^{*1}を全市で推進しています。言わば探究的な学びですが、そのムトスの学びと両輪を成す教科学力の向上が重要だと考え、授業改善に取り組んでいます」

同市は、文部科学省「全国学力・学習状況調査」以外に、業者による学力調査を長らく実施していた。小学6年生と中学3年生以外の学年でも、教員の授業改善や子どもの学習改善につなげるためだ。ただ、対象学年や実施時期・回数は各学校に任せていたため、例えば、同じ学校でも実施する学年と実施しない学年があったり、実施する学力調査の種類が異なっ

たりしていた。学力を把握する尺度が様でないため、各校で足並みがそろわない、経年変化を追えないなど、調査結果を踏まえた授業改善を組織的に行いにくい状況だった。

そこで市教委は、学力調査の実施形態を見直し、2023年度から毎年4月、小学2～5年生（国語・算数）、中学1・2年生（国語・数学・英語）を対象に悉皆で「総合学力調査」^{*2}を実施することにした。

「一人ひとりの子どもの変容を定期的に把握し、教員は授業改善に、子どもは学習改善に生かすことこそが、学力調査の目的です。『全国学力・学習状況調査』と併せて総合学力調査を実施し、経年で小学2年生～中学3年生の個々の学習状況が見える化するようにしました」（熊谷教育長）

研究主任会で、授業改善を念頭に結果分析の手法を提示

全教員が調査結果を基に授業改善に取り組めるよう、市教委は全校の研究主任が参加する研究主任会で様々な工夫をしている。同会は毎年



教育長

熊谷邦千加

くまがい・くにちか
長野県公立中学校教員、校長等を経て、2022年度から現職。



学校教育課教育支援係
教育指導専門主査

木下耕一

きのした・こういち
長野県公立小・中学校教員を経て、2022年度から現職。

6、8、2月にオンラインまたは参集で実施する。学校教育課の木下耕一教育指導専門主査はこう説明する。

「自分の教員時代の経験を考えると、先生方は平均正答率などに目が行きがちで、調査結果を具体的な授業改善に落とし込めていないのではないかと思います。調査結果をどう見取れば授業改善に生かせるのかを研究主任が理解し、それを校内研修で実践できるようにしようと、研究主任会の内容を組み立てました」

8月に実施した研究主任会では、「できるようになりたい“この1問”」から具体的な授業改善や支援を考えるワークショップを行った。同会では

*1 「ムトス」は、「～しようとする」という意味がある。飯田市は行動への意欲や意思を表す言葉として使用しており、地域活動では「ムトスの心」を合言葉にしている。学校教育でも、子どもが「～しようとする」こと、つまり子どもが主語となる授業の実践を目指して「ムトスの学び」をキーワードとした。 *2 ベネッセが提供するアセスメントの1つで、「教科学力」と「学習意識」を併せて把握できる調査。

まず、8月に返却された「全国学力・学習状況調査」で、架空の結果を用いた図を作成し提示した(図1)。平均正答率を見ると、A中学校の値は全国の値より4ポイント低かったが、正答数の分布グラフを見ると、中央値は全国が「8」、A中学校が「7」だった。つまり、あと1問正答すれば、全国の値に近づけることが分かる。

『平均正答率が〇ポイント下回った』と言われても実感しにくいですが、『あと1問』と言われてれば目標が明確になります。そう示すことで、先生方が何を改善すればよいかを考えやすくしました(木下主査)

「あと1問」を見つける方法として、正答数の多い順に児童生徒を並べたS-P表³の見方を説明。例えば、設問ごとの正答数から、子どもができた設問とできなかった設問を確認する方法や、正答数が多い設問で誤答した子どもはケアレスミスや反復練習の不足などが原因で間違えた可能性が高いことなどを伝えた。

S-P表の見方を学んだ上で、各学校の研究主任は、小学校は5年生の国語、中学校は2年生の国語のS-P表と問題冊子を見て、自校の児童生徒ができるようにしたい1問を選び、それが解けるようにするための授業改善・支援を考えて、クラウド上のシートに入力した(図2)。

「重要なのは、選んだ1問を今までどう教えていたのかを振り返ることです。例えば漢字の1問を課題視して、その原因がクラス全員で同じドリルに一齐に取り組んだ結果だと総括したら、次は個別最適な学びを取り入れるということにもつながるでしょう」(木下主査)

クラウド上で各学校の実践を共有し、研究主任が学び合う

入力シートは、クラウド上で共同

図1 研究主任会で示した学力調査の正答数の分布グラフ

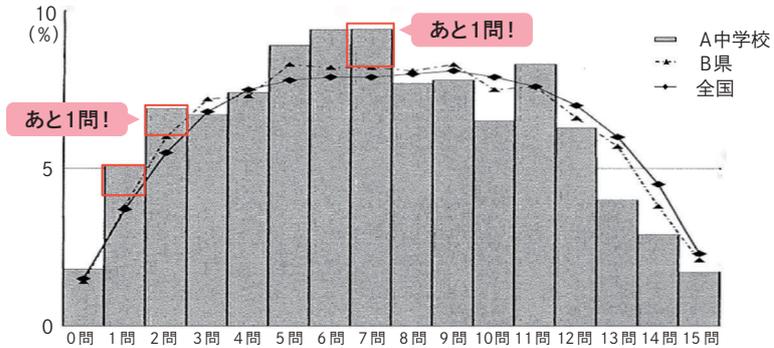
「全国学力・学習状況調査」結果概要 数学

	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
A中学校	101	7.2/15	49	7	3.9
B県(公立)	20,000	7.5/15	51	7	3.9
全国(公立)	900,000	7.6/15	53	8	4.0

あと1問!

正答数分布グラフ(横軸:正答数 縦軸:割合)

*結果は架空のもの。



研究主任会で、調査結果を分析する手法を説明するために用いた正答数の分布グラフ。このグラフを使って、全国の平均正答率を上回った、下回ったという視点のみで結果を捉えるのではなく、全国との差は具体的にどうすれば埋められるのかを考える方法を示した。*飯田市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

図2 「できるようにになりたい“この1問”」の研究主任会の入力シート(抜粋)

学校番号	できるようにになりたい“この1問”	その1問を選んだ理由	その1問をできるようにするためにやりたい指導・支援
No.	「できるようにならない“この1問”2つでもOKです」	理由	どんな指導改善や支援ができそうか
1	2-5「手を焼く」を正しく使っている文を選ぶ	低位の子でも正解している半面、正答数が高い方の児童でも間違っている児童がいるので。	慣用句にあまり触れていない児童がいることが慣用句に触れる機会を取るとともに、読書の時間
2	4-(1) 洋平の気持ちをを選択する問題	他の問題に比べ、正答数が急激に下がっているため(青線の傾きが急になる)。	消去法的な考え方・問題解決場面は、授業ではあ業)。友達がたくさん気持ちを読み取り、その考えは違うのでは?」を言い合える学習環境・場になると思う。
3	3-(1)文章の後半部分が始まる段落を選ぶ。	段落構成の学習は、全学年共通して大事な学習になるため。	説明文の学習の中で、段落構成や役割を各学年の。さらに、自分で文章を書く時にも、段落構成いく。
4	2-2イ	2の単元の知識・技能の部分で弱い問題が多く、特にこの漢字については正解率、全国平均との差が大きいため。	漢字学習など、知識・技能の学習の取り組み方を積極的にできるように働きかけや知識を得る場の
5	4-(3)	変化を読み取り記述する問題。個人差をとても感じるから。	条件に合うように答える学習。友だちとの考えを

各学校の研究主任が選んだ“この1問”は、慣用句の設問や段落構成を考える設問など様々挙がり、選んだ視点も異なっていた。それをクラウド上で一覧化して研究主任間で共有することで、自分にはない視点を学び、多様な分析と授業改善につなげることを目指す。*飯田市教育委員会の提供資料を抜粋して掲載。

編集ができるツールを活用。同じツールを、研究主任会の振り返りシートや、各学校が調査結果を基に自校の課題を見だし授業改善の取り組みを考えて入力する「取り組みシート」などにも活用し、1つのファイルを市内全校の研究主任が見られるようにした。そうすることで、ほかの研究主任の分析を参照したり、他校の取り組みを参考にしたりと、互いに学び合う場が自然にできあがった。

「研究主任同士の学校を超えた横の

つながりができ、研究主任会以外の場でも情報交換をしたり、悩みを相談したりするようになってきています」(木下主査)

研究主任対象のチャットも2023年度に開設した。当初は、資料の共有や問い合わせへの回答など、市教委からの情報発信が中心だったが、次第に研究主任から発信する実践報告が増えていった。「校内研修で調査結果をこのように分析した」「分析を基にこうして授業改善を進めている」

*3 学校や学級単位で、縦と横がそれぞれ児童生徒(S: Student)と設問(P: Problem)の正答数の多い順に並べ替えた表の中に、S曲線とP曲線を書き入れたもの。それを活用することで、平均正答率だけでは把握できない、学校や学級全体の課題の傾向や、個々の児童生徒が理解していない可能性が高い設問を見つけたことができる。文部科学省のウェブサイト (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiledfile/2018/09/28/1409621_1.pdf) で詳しく説明されている。

など、各学校の実践の過程がリアルタイムで共有されている。

「研究主任会で行っている、個人の考えや実践を他者と共有して学び合い、個人の実践に生かす方法は、子ども同士の学びにも生かされます。共同編集ができるツールやチャットを活用した学びの手法そのものも授業づくりに生かしていけるよう、先生方に呼びかけています」(木下主査)

子どもも調査結果を振り返り、自己調整する学びを目指す

研究主任会では、児童生徒の個人票を子どもに渡す際、子どもが個人

票を見て振り返りを記入したり、教員が子どもと面談したりすることを求めた。加えて、保護者にも結果だけでなく子どもの振り返りを見てもらうよう周知してほしいと伝えた。

「子どもにとっても、結果を見て、自分で気づいたことや今後取り組みたいことを、その子なりの言葉でよいので、書いたり語ったりして、学習改善につなげることは重要です。よさも課題も含めてきちんと自分の結果と向き合い、目標に向けて何をすればよいのかを考える経験を、低学年から積み重ねていくことで、学習指導要領で育成することが求められている『自分の学習状況を把握し、目標

に向けて自己調整し、粘り強く取り組む力』が育まれていくと考えています」(木下主査)

現在市教委では、中学校区単位で小中一貫教育を推進する学園構想を2025年度の導入に向けて検討している。子ども一人ひとりの学力を小・中9年間で継続して把握することは、小中一貫教育の一步と捉えていると、熊谷教育長は語る。

「学力調査で子どもの学力を把握して授業改善・学習改善に結びつけていく学力向上と、ムトスの学びによる探究的な学びを両輪として、これからの地域の未来を切り拓く子どもたちを育てていきたいと思います」

実践事例

研究主任会で学んだ分析方法を共有し、“この1問”を選ぶ校内研修を実施 飯田市立浜井場小学校

どの教員も自分事として結果を分析

8月の研究主任会で、「できるようにになりたい“この1問”に「文章の後半部分が始まる段落を選ぶ問題」を選んだ研究主任の壬生光江先生。その理由を「他学年も説明文に関する設問の正答率が高くなく、説明文の読み方は1

年生から積み上げていく分野であるため、全学年で授業改善を検討できると考えました」と語る。

分析結果を授業改善に生かせるという実感を持った壬生先生は、8月下旬、研究主任会を踏まえた校内研修を実施。正解数の中央値に着目すると「あと1問」が重要であることと、具体的な1問を見いだすS-P表の見方を説明。低・中・高学年ごとに担任が組み、「できるようにになりたい“この1問”を選び、授業改善について話し合った。

「2学期の授業づくりでは、1問を選ぶ際に考えたことを意識しようと、校内で共有しました。学力調査の実施学年が2～5年生となったため、どの教員も当事者意識を持って結果を分析し、同じ学力調査を基にするので話し合いがしやすくなりました」(壬生先生)

個人票の返却時の子どもとの面談も、担任に呼びかけて全校で実施。3学年担任の壬生先生は、子どもに事前に振



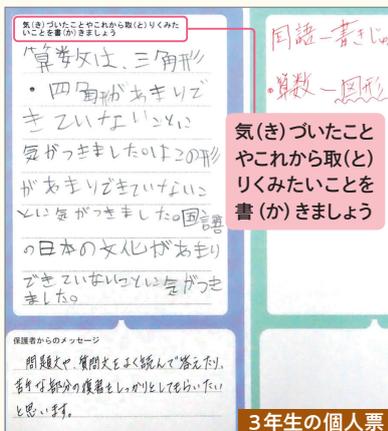
研究主任
壬生光江
みぶ・みつえ
3学年担任。

学校概要

児童数 96人 学級数 8学級
教員数 21人

り返りを書いてもらい(写真)、それを見ながら1人5分程ずつ面談をした。

「物語文を頑張りたいと書いていた子どもには、『2学期にも物語文が出てくるから意識して勉強するといいね』などと話しました。3年生でも多くの子どもが、自分なりの言葉で結果を振り返っていました」(壬生先生)



3年生の個人票

写真 写真は、3年生の個人票の振り返りの欄。子どもは正答率が低かった分野に丸をつけて気づいたことを書き、保護者はそれを読み、励ましの言葉を添えた。

Web VIEWnext ONLINE

取り組みの詳細をウェブサイトで紹介しています。右記の2次元コードからアクセスしてください。

